

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
共同プロジェクト研究  
2020年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名	
	現代心理学部・教授		大石 幸二 印	
研究課題	他者との共感の起源を探る—乳幼児の身体動作の同期現象が非認知的能力に及ぼす影響—			
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2021年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名	
	<b>研究代表者</b> ◎立教大学・現代心理学部・教授  <b>研究分担者</b> ○星美学園短期大学・幼児保育学科・准教授 ○星美学園短期大学・幼児保育学科・准教授 ○作新学院大学女子短期大学部・幼児教育学科・専任講師 ○立教大学大学院・現代心理学研究科・院生		大石 幸二  遠藤 愛  中内 麻美  矢野 善教  和田 恵	
研究期間	2020年度 ~ 2022年度			
研究経費※ (上段:支出金額)	2020年度	2021年度	2022年度	総計
	1,557,209 円	0 円	0 円	1,557,209 円
(下段:採択金額)	1,992,000 円	1,838,000 円	1,958,000 円	5,788,000 円

※1円単位で記入

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究では、他者との共感の起源を、身体動作の同期現象の発現に求めて研究を推進する。そして、この研究でターゲットとするのは、「社会的随伴性」が作用して他者知覚・認識が芽生え、「創発的な共同行為」が発現し、偶発的に対人相互作用が成立する1~2歳台で見られる行動現象である。このような共同行為が発現し、対人相互作用が成立するには、他者と共に活動する場において自分自身の身体を能動的に動かすことが主要な変数であると仮説を立てた。この仮説を検証するため、身体動作の同期現象を実態把握し(第1年次)、子ども同士の身体的追従を解明し(第2年次)、身体動作が社会的に促進されることを検証する(第3年次)。

(300字)

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 身体動作 } { 同期現象 } { 非認知的能力 }

## 研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

第1年次の研究課題(身体動作の同期現象に関する実態把握)で分担した内容は、**大石**(研究代表者)が「逆模倣・社会的随伴性の効果確認」、**遠藤**が「保育者と乳幼児の相互作用確認」、**中内**が「身体動作の同期現象把握」、**矢野**が「逆模倣・社会的随伴性の予備調査」であった。**和田**(大学院生)は、研究代表者の研究補助を行った。

**大石(研究代表者): 逆模倣・社会的随伴性の効果確認** (\*和田による研究補助)

本プロジェクトは、1~2歳児を含む乳幼児を対象とする《観察法》を用いた研究である。保育所を中心とする子育て支援施設における身体動作の同期現象に関する実態把握を行うことが第1年次の全体的な研究課題であった。研究代表者は、鹿児島県(鹿児島市)と青森県(八戸市)を研究フィールドとして自然観察を行う準備を進めていた。けれども、COVID-19(パンデミック)の影響により、2020年度については、度重なる緊急事態宣言や県を跨ぐ移動の自粛要請のため、一都三県からの受け入れがすべて中止となった(\*旅費交通費が未執行である理由)。

鹿児島県では、鹿児島県こども総合療育センター・所長(小児科医)と相談を行い、鹿児島市を拠点としつつ、始良市および霧島市において実践研究を進めていくことを確認した。そして、その布石として「発達障害地域支援専門員フォローアップ研修」にオンライン研修の企画を載せる格好で、今後フィールド・リサーチを進めるための資質向上研修を実施した。そのキーワードは、《診断閾下の発達に心配がある乳幼児》ということであった。また、本プロジェクト研究が《診断閾下の発達に心配がある乳幼児》の支援に貢献するための社会実装に備えて、上記の所長の助力を受け、鹿児島県医師会(かかりつけ医)にアンケート調査を依頼した。小児科のほか、精神科や心療内科の医師が《診断閾下の発達に心配がある乳幼児》の診療に携わり、保育所・幼稚園および学校と連携している例も数多く見られた。ただし、発達障害にかかわる診療には時間がかかり、経験と専門性が求められるため、簡易なアセスメント・ツールの開発、もしくはシステムティックな生育・保育記録の提示が必要であることが判明した。後者の課題については、本研究により得られる知見が大いに役立つことが予測される。

一方青森県では、認定こども園・八戸文化幼稚園・園長(教育委員会教育委員)と相談を行い、保育士・幼稚園教諭のスキルアップ研修を企画した。これは、保育士・幼稚園教諭の観察力量を涵養し、振り返りに堪える記録を作成し、保育計画の深化を達成するためのものであった。その実施の結果として、保護者に対応するスキルを高め、保育者と乳幼児だけではなく、保護者と乳幼児の間の共感性や共有、コミュニケーションを高めることに寄与する資料を入手したいとのニーズが提示され、オンライン配信用のQ & A方式の動画を作成した。1~2月下旬を配信期間とし、保護者および保育者からのフィードバックを3月末に受け、第2年次の研究に結びつける計画である。

以上の2つの実践型研究は、何れもオンラインで実施した。そのため、配分された研究費は、①ロールプレイの様子を2方向から撮影するためのビデオカメラ、②本研究専用のPC、③オンライン配信用のソフトウェア、④研修資料作成用の書籍と、⑤消耗品の購入に充てた。⑤の消耗品を除き、①~④は、第2年次以降の研究にも有効活用することができ、COVID-19(パンデミック)の終熄後、ただちに実態把握のための調査に着手することができる。

**遠藤(研究分担者): 保育者と乳幼児の相互作用確認**

共同研究者(**遠藤**)は、かねてより埼玉県内の公立幼稚園を研究フィールドとして乳幼児の自然観察を行う準備を進めていた。けれども、COVID-19(パンデミック)の影響により、訪問日時や回数に制限が生じ、共同研究者が児童の様子を直接観察する機会の確保が困難となった。よって、公立幼稚園の特別支援教育コーディネーター(SENCO)や園長と相談し、身体動作の同期現象が生じる可能性がある保育・教育活動中の「片付け場面」と「自由遊び場面」の映像データを収集し、VTR映像による間接観察を実施する予備的研究に研究デザインを切り替えた。12月に映像データの収集が完了し、1月以降に観察と分析作業を進め、インフォーマント(SENCOおよび園長の意見)の意見を伺う機会を得ながら、2021年5月を目処に予備的研究の成果がまとまる予定である。

なお、共同研究者は本プロジェクトにおける「乳幼児の同期現象」を捉える研究と並行して、「保育者の乳幼児に対する働き掛けの改善」に資する研究を推進している。保育者の働き掛けの改善(すなわち、支援行動変容)の予備的検討を行うために、前述した埼玉県の公立幼稚園の園内研修を通じて、児童への働きかけを行う際の保育者の心的過程にかかわる予備的データを収集した。これらの実践は、①保育カンファレンスにおける保育者の児童の見立てや保育に関する語り(言語記述)を分析すること、②幼稚園教諭の省察を助ける記録としての「個別の保育指導計画」の書式や運用方法を検討するためのものであった。これらの実践から得られた知見については、すでに研究論文(①雑誌論文)や学会発表(④その他《学会発表》)にて成果報告を済ませており、次頁に示している。

以上の2つの実践型研究を実施するために配分された研究費を、①本研究専用のPC、②研修資料として用いるモデル映像(DVD教材)、③研修資料作成に必要な消耗品、④研修に用いる機材の附属品(消耗品)などの購入に充てた。①②については、第2年次以降の研究にも有効活用することができる。今後の計画としては、第1年次の予備的検討を踏まえ、COVID-19(パンデミック)の終熄後、保育現場での直接観察による実態把握と、保育者の働き掛けに関する相互作用の分析をより一層進める予定である。また、第1年次に実施した上記2つの実践型研究は、

**研究【経過・成果】の概要 (つづき)**

3～5歳の幼児が主対象であり、本研究が解明をめざす発達早期(1～2歳児)の行動様相を対象としていない。よって、これらの予備的資料を参照しながら、対象を保育所の乳児に拡げ、保育者と乳幼児の間の共感性や共有、コミュニケーションを高めることに資する研究知見を蓄積する予定である。

**中内(研究分担者): 身体動作の同期現象把握**

共同研究者(中内)の分担研究課題は、保育所を中心とする子育て支援施設(児童福祉施設)における身体動作の同期現象に関する実態把握を行うことであった。COVID-19(パンデミック)の影響により、2020年度については、福祉施設におけるクラスター発生防止の観点から、参与観察による研究実施はすべて中止となった。したがって、以下の通り、新たな研究フィールドの開拓と研究実施の準備を行うよう、研究計画を調整して遂行した。

特別なニーズをもつ乳幼児の保育では、子どもの反応が過敏、または微弱など特徴的であることから、保育者が子どもの感情や要求を共有し、共感するといった相互的な関わりが難しい場合が少なくない。保育所の自由あそび場面における観察法を用いた非言語情報の実態把握として、自然観察と保育者へのインタビューを組み合わせ、乳幼児の特性等に応じて保育者がどのように非言語的関与を使い分けているかを明らかにすることができる。この先行研究をふまえた知見を生かして、保育所の自由あそびを対象とした参与観察および保育者へのインタビューを計画している。また、本年度は、新たに神奈川県、埼玉県、沖縄県内にある保育所に研究協力の承諾を得た。これに加えて、第2年次の研究を円滑に進めるため、保育者へのプレゼン資料の作成、研究実施およびフィードバックに必要な資料作成も完了した。

以上の研究フィールドの開拓と研究実施の準備を整えるために、配分された研究費は、①研究説明及び研修資料作成用のスキャナー、②研修資料作成用の書籍、③消耗品の購入に充てた。①～③は、第2年次以降の研究にも、有効活用することができ、COVID-19(パンデミック)の終熄後、ただちに実態把握(調査)に着手する。

**矢野(研究分担者): 逆模倣・社会的随伴性の予備調査**

研究分担者(矢野)は、保育所や幼稚園における乳幼児の社会的な随伴性の獲得に向けた取り組みを行う予定であった。社会的な随伴性の中において「逆模倣」に注目し、乳幼児の行動を保育士や幼稚園教諭が逆模倣することにより、乳幼児の行動や情緒的な発達にどのように作用するかを検討することを目的としていた。逆模倣は、自分自身の行動と他者の行動が対応していることを明らかに示すものであり、模倣される事象が自己に類似した他者への認識の裏付けとして考えられている。そして、自己が他者から模倣されているという気づきは、その後の社会的関係の構築の発達基盤となるとも考えられる。また、近年、自閉症児の療育において、他者から自己と同じような発声や行為で逆模倣される経験と逆模倣への気づきが自閉症児と他者の日常のコミュニケーションに影響を与え、社会的関係を築く1つの手段(社会関係資本)になるとも考えられている。ただし、COVID-19(パンデミック)の影響により、所属機関の方針で栃木県内の保育所や幼稚園への研究協力依頼自粛となり、研究協力そのものを行うことができない状態となった。

12月に入り、所属機関の非常勤講師として勤務している関係者の園への研究協力依頼が認められ、研究分担者の所属機関に、非常勤講師(科目「人間関係(指導法)」担当)として勤務している幼稚園園長の幼稚園へ研究協力を依頼することができ、COVID-19(パンデミック)の状況が悪化しない限り、研究協力を引き受けていただけることが内定した。この研究協力が12月であったため、研究の詳細を説明できておらず、一都三県における緊急事態宣言の再発出と、一都三県と交流のある北関東における連日の新規感染者数の記録更新を受けて、緊急事態宣言が解除され、移動自粛要請が完全に取除かれた後に、園長に対して研究内容の詳細な説明を行う予定である。今後は、研究協力先を研究分担者の所属機関の非常勤講師の園を中心に依頼を拡大し、第2年次研究に繋げる予定である。

配分された研究費は、10月から12月までの期間に、①保護者や幼稚園教諭への研究内容説明に活用するための「非認知能力」関連の書籍、②次年度以降、幼稚園での幼稚園教諭と園児の様子を撮影した動画を編集・分析するためのパソコン、③幼稚園教諭と園児の様子を撮影するビデオカメラと三脚・カメラケースの購入に充てた。①②③は、次年度以降の幼稚園での研究および研修において活用することができ、①は更なる研究協力依頼の際にも、活用することができる。

以上のように、研究代表者、研究分担者とも、COVID-19(パンデミック)の影響に翻弄されながらも研究の手を止めることなく、可能な計画やデザインの調整、オンラインによる調査の試み、第2年次にただちに研究着手するための交渉と準備に努力した。そして、文献研究や資料整理、あるいは限られたインフォーマントから得た情報をもとにしながら、研究成果の公表も積極的に行った。この成果を第2年次に繋げられるよう引き続き連携を図る。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文** [研究者別/降順]

- 1) 伊東佳寿子・大石幸二・菊池春樹 (2020). 自己を保ちながら他者と関わるスキルと自閉症スペクトラム指数との関係—自他境界の観点からの検討—. 東京成徳大学臨床心理学研究, 19(1), 93-106. (2020年5月1日発行) \*査読なし
- 2) 大石幸二・中内麻美・竹森亜美・出野由花・山田圭祐・近藤悠海 (2020) 知的発達症のある中学校生徒における意見表明の学習と支援—活動計画の相談場面における相互作用の変化—. 人間関係学研究, 25(1), 53-62. (2020年12月25日発行) \*査読あり
- 3) 秋元響・大石幸二・若井広太郎・藤島瑠利子 (2020). 自閉スペクトラム症児の心理化の促進—逆模倣による介入の効果—. 人間関係学研究, 25(1), 75-86. (2020年12月25日発行) \*査読あり
- 4) 遠藤愛・若林上総 (2020) 幼稚園における個別の指導計画の運用プロセスへの支援—園内支援体制の変化に着目して—. 発達人間学研究, 20(2), 61-67. (2020年12月21日発行) \*査読あり
- 5) 中内麻美 (2020) 子どものセルフコントロール—発達障がい児の支援から学ぶ—. 日伊総合研究所報, 16, 24-27. (2020年3月20日発行) \*査読なし
- 6) 矢野善教 (2021) 「障害児保育」のオンライン授業の取り組み—疑似体験を通して—. 作新学院大学女子短期大学部研究紀要, 4, 1-7. (2020年12月27日発行) \*査読あり
- 7) 設楽紗英子・長澤順・吉澤麻衣・矢野善教 (2021) オンライン授業を用いた保育実習指導 II の実践と評価. 作新学院大学女子短期大学部研究紀要, 4, 9-18. (2020年12月27日発行) \*査読あり

**② 図書** [降順]

- 1) 大石幸二 (2021). 地域における多職種連携の視点からの包括的支援. 神尾陽子編著 発達障害のある子のメンタルヘルスケア. 金子書房, Pp. 54-60. (2021年3月25日刊行予定)

**③ シンポジウム・公開講演会等の開催**

なし

**④ その他** [研究者別/降順]

- 1) 金谷裕香・大石幸二 (2020). 「とけあう」体験がもたらす母親の体験認知過程の変容—自閉スペクトラム症幼児を育てる母親の気づきに関する事例研究—. 日本特殊教育学会第58回大会 (福岡教育大学; オンライン開催). ポスターP8-14.
- 2) 出野由花・竹森亜美・大石幸二 (2020). 発達障害児の身体調整能力向上のための粗大運動課題の実践—風船バレー活動を通して—. 日本特殊教育学会第58回大会 (福岡教育大学; オンライン開催). ポスターP12-44.
- 3) 遠藤愛 (2020) 幼稚園の特別支援教育コーディネーターにおける担任支援. 日本保育学会第73回大会 (奈良教育大学; オンライン開催). 口頭発表.
- 4) 遠藤愛 (2020) 保育カンファレンスの進行役が行う調整行動の予備的検討—特別支援教育コーディネーターへのインタビュー内容の分析—. 日本特殊教育学会第58回大会 (福岡教育大学; オンライン開催). ポスターP11-2.